僕の叔母さん

芥川龍之介の（父）を読んでいたら或る言葉に何度も出食っわした。僅か原稿用紙十枚、の作品中に頻繁に出てくる、ちゃくい、である。今から百年前の１９０９年、旧制中学四年生であった府立三中の生徒達が、三泊の予定で行く修学旅行の待ち合わせ場所、上野駅構内での或る一シーンを描いた佳品である。生意気盛りの十六、十七歳が徒歩や電車で三々五々、自宅から上野駅に集合した。集合時間までの僅かの間に彼等が駄弁を要するのは昔も今も変わらない。特に男子同士であれば内容も過激な貶しごとが多い。その代表がクラスで人気者の能勢という生徒だ。周りを囲む生徒達が次々に調子を合わせ囃し立てる。その風景を芥川は、七年後、実に巧みに記述した。例えば

『泉はちゃくぜ、あいつは教員用のチョイスを持っているもんだから、一度も下読みなんぞした事はないんだとさ。』
『平野はもっとちゃくいぜ、あいつは試験の時と云うと、歴史の年代をみんな爪へ書いて行くんだって。』
『そう云えば先生だって、ちゃくいからな。』
『ちゃくいとも、本間なんぞは・・・いい加減にごま化しごま化し、教えているじゃあないか。』
どこまでも、ちゃくいで持ちきるばかりで一つも碌な噂は出ない。と、まあこんな具合である。

（同人誌）第四次新思潮創刊号に発表した（鼻）を、夏目漱石に褒められた直後に綴ったのが、四月号の（孤独地獄）や、五月号のこの小品（父）である。芥川は二十四歳の大学卒業間近であった。（１９１６年）この文中で彼は、ちゃくい、を五度遣っている。ちゃくい、とは狡賢いの謂いである。

僕はこの言葉から、直ぐに自分の身内の叔母のことを思い出した。叔母は自分の故郷である甲府に住んでいる。そうして、以前、身内同士で寄り合って話しに花が咲くと実にうまいタイミングで、『ちゃくいじゃんね！』と茶々とも、冷やかしとも付かぬ口を入れるのだ。絶妙なのである。僕は、東京暮らしが長くなっているから久し振りに聞く、この、ちゃくいに何とも云えぬ愛着を感じたものだ。

そうして、てっきり山梨の言葉、甲州方言と思っていた。だから、芥川の作品に出てきた時は、へえーと吃驚したのである。東京人も遣うんだ！。そうか、実際はこの言葉は東京の下町言葉なんだ！という暗黙な理解だった。

僕の親戚中、ちゃくいを遣ったのは、確か叔母のみだったと思う。方言丸出し僕のオヤジやお袋からも、ちゃくい、の言葉は聞いたことが無い。

さらに申せば、芥川は、やはり府立三中の時に、（水の三日）という作文を書いている。十三歳、学校近くの小松川が氾濫し水害被災にあった多くの住民たちを、生徒達が手助けした記録のようなものである。そこでは、せっせ、せっせ、せっせ、とみんなで働いたとの記述が見える。せっせ、とは休まず働くことである。すると、僕は、この言葉も懐かしく思い出した。やはり、叔母が、『せっせ、と働けし！』と誰かに向けて笑顔で言ったのを覚えていたからだ。愚図愚図していないで、ぱっぱと動け、男なら差し詰めこんな風な具合の会話になるだろう。他愛ないと云えば他愛ないことであるが、東京暮らしも無い叔母の会話の妙と芥川龍之介の作品の一致は、甚だ面白い。

叔母は今年八十三歳になると言った。一昨年、黄泉路へ旅立った僕の母とは七つか八っ違いになるらしい。今では（やすきよ！）と呼んでくれる唯一の親族である。

叔母は四十代早々に伴侶を病気で失っている。当時、高校生と中学生を抱えた暮らしは半端でないくらい厳しかったようだ。生前の母からそんなあらましを聞いている。苦労人だから、人の短を言わない、イヤな顔を見せない、若い者達の聴き役に回っている。そうして、雑談が盛り上がり僕等の都合の良い方に話の内容が一方的に傾くと、誠にタイミング好く、ちゃくいじゃんね！とか、せっせとしろし！とか、おさっさだね！（お調子者のこと）と、東京人に引けをとらない揶揄を言って満座の皆を笑わせる。誰もが、一本、面を取られてしまう。

僕は、昔々、この叔母にウソを付いてお金をせしめた事があった。未だ、僕が十歳の小学三年か四年生ぐらいであったろうか。叔母はすでに結婚していた。数人の僕の仲間がつるんでいて、その中の兄貴格のトムさんが僕を唆したと記憶しているが、お調子もんの僕が率先して、それを実行したかも知れない。いずれにしろ、叔母からお金をせびり出したのは確かだった。当然、父母の知るところとなって大目玉を食った。大きくなるにつれそんな記憶も風化していたが、澱んだ記憶として僕の心の底のまた底に横たわっている。叔母が、とんでもない、ぼこ（甲州方言で子供のこと）と思っていたのは至極、当たり前のことだろう。

大ドロボウや詐欺師にもならなかった僕だが、様々な人生の失敗があった甥(おい)っ子を、叔母にしてみれば内心ハラハラして眺めていたに違いない。母などは、僕が失望の連続を与えてばかりいたので、子としての存在をほとんど諦(あきら)めていたから。

三つ子の魂、百までもと云う、先人の 諺(ことわざ) を噛み締める昨今(さっこん)、僕も七十歳の古希を迎える。